

東北応援ツアー、提出レポート

辻 久志 1998(平成10年)卒 政策科学部

2011年の3月に震災があつてから、今回の海岸線沿いに走る車に乗って現地を視察してみて、改めて津波の大きさと、未だに残る爪痕を見ている思いがしました。

襲ってくる津波の高さを志津川の高校の先生からの説明を交えて見てみて、ただ逃げるしかなく、最終的に自分の命は自分で守ることしか出来ないような気がしました。震災当日、うまく逃げることができて助かった方、屋根や屋上に上がり間一髪助かった方、これから起こるかもしれない自然災害に対する防災の大切さを伝えられて、私もいつ起こることがあるかもしれないと、心に準備をしておく必要を覚えました。震災直後の支援も、支援する側が被災していて、被害が広範囲に及ぶと、中々自分の所まで手が回らないこともあり、各地から現場へ多方面からの支援がいるように思いました。

津波を完全に防ぎ切ることには出来ないと思うと、女川のように人が居住する場所は大部分に高台とするというのも、すごく考えられていることで、港周辺や海沿いは思い切って広い土地に渡り、観光や商業的に全体をデザインして使う取り組みも、理に適うものだと現地の視察中考えました。

震災に合われた方は、住んでいる家が被害にあわれた方だけでなく、生計を立てているお店や生産施設が津波にあわれていて、それから先に生きていく伝が、崩壊してしまっているお話がありました。商品が製造出来なくなるだけでなく、工場を再建するのに現実として多額の費用が掛り、訪れた当日に至る苦労が並大抵でなかったと感じました、これから先に、再開のため借りたお金ですとか、現在に至っても、震災前の状態に戻れたということだけでなく、やはり大変なのだろうと推察されます。

宮城県は他県からや海外からの観光客も、特に海沿いで多い地域であると思います。復興支援事業東北応援ツアーの2日目に松島をフェリーの上から航行することが出来て、港に乗船を待つ観光客の賑わいを見て、また客室に座り肩の力を少し抜いて、ガイドさんからの島々の解説を聞き楽しめた時間でもありました。

再びバスで移動した、名取川河口の閑上は、仙台のベッタタウンでもあり海の近くに人の住まいと工場が集中してあつたので、津波の被害をまともに受け、一面がなぎ倒され更地になってしまった後が、現在までもあるように見えて来ました。被災当日の帰宅から、震災後初めて家のあつた場所へ戻れた時の話など、語り部の方から今日までの様子を伺いました。日和山から海や慰霊碑の方角へまで見渡し、お祈りしました。

宮城に訪れ、被災に合われた方から、私たちがお土産を頂き、美味しい食事を頂いて、東北応援ツアーで訪れて、していただいたことの方が、私たちが出来たことよりも多かったです。また次の機会でお礼ができればと思います。